

### 3年間のまとめ〔疫学班(1)〕

分担研究者：山下 文雄

#### 〔研究目標〕

北部九州地域の SIDS 発生頻度を知り、発生に関係するリスク因子を決めることである。

#### 〔年度別研究計画〕

- (I) 56年度：(1)疫学調査の予備調査(文献研究、方法論、統計法、評価法の検討)、(2)北部九州地区における SIDS (広義、狭義、不全例)発生率の調査(第1次)。
- (II) 57年度：(1)北部九州地区での SIDS 発生の調査(第2次調査)、(2)リスク因子の設定。  
(3)低出生体重児での SIDS 発生とリスク因子の後方視的および前方視的研究(第1次)。
- (III) 58年度：(1)リスク因子の設定と予防への応用、(2)体出生体重児での SIDS 発生の研究(第2次)。

#### 〔研究結果〕

1. 調査方法論：Dr. Henry L. Barnett の好意で入手した米国 NIH の Cooperative Epidemiological Study of Sudden Infant Death Syndrome Risk Factors の方式 National Institute of Child Health and Human Development: An Evaluation and Assessment of the Science. Sudden Infant Death Syndrome, ed. by H.L. Barnett and J.C. Hunter, NIH, Bethesda, 1981. を疫学者(研究協力者)を中心に、今回の研究に用いられるかを検討したが、わが国では SIDS と思われる場合でも剖検率が低いので確実な SIDS 例がえられにくいことと、米国のように徹底した面接者を使つての疫学調査は不可能というのが結論であった。しかし各基準等参考になること多く、なかでも「出生2週後から2才まで」との年齢区分はそのまま用いて、つぎの疫学調査が行われた。
2. 北部九州での SIDS (広義)発生率：(1)北九州市、福岡市、久留米市、大牟田市、佐賀県、1979～1981年3年間にわれわれのアンケートに医師が経験したと報告した生後2週から2才未満で広義の SIDS 例は合計7例であった。
- 1979年度の上記全地区の新生児出生数は51,197人であったから、3年間7例から1年間7/3例とし、51,197人を母数とすると広義の SIDS 発生率は0.044/1,000となった。症例のもっとも多かった北九州市では15,332(1979年度出生数)中5人/3年故、0.11/1,000の率となる。(2)1982年、昭和57年度に剖検で確認された SIDS が、北九州5、福岡1あり、北九州では4/15,332で0.2/1,000の率となる。(3)医師へのアンケートの回収率は40.2%で、1979年より前の(ニアミスを含む)経験例すべてを入れると「経験あり」との返事1,685中78件であったから、4.6%の経験率であった。すなわち医師の約5%が SIDS

かそれに近い経験があることになる。(4)広義の SIDS 7 例中 3 例は剖検されており、1 例は巨細胞性肺炎であり、1 例のみが剖見所見が真の SIDS に相当した。

7 症例の発生状況、各種要因が検討され、これまでの SIDS で云われていることに一致した。

**3. 低出生体重児での SIDS 発生とそのリスク因子：**久留米市聖マリア病院 NICU を生存退院した低出生体重児の(1980～1982、3年間)2,049名中6名が広義の SIDS に入った。この率(2.9/1,000)は、北部九州地区での発生率の30倍以上の高率である。1 kg未満の超未熟児では発生がなかった。コントロール110例(在胎、出生体重範囲の同じ)と各要因の頻度を比較した所、無呼吸(67%対21%)が有意差があり( $P < 0.05$ )、新生児期の anoxic episodes(83%対42%)は $P = 0.05$ に近い結果をえた。(詳細なデータは、昭和58年度報告参照)

#### 4. 剖検よりみた SIDS (狭義)の適中率および剖検診断の変化例

北九州市産業医大開設来(昭和57年7月)小児科に転送されてきた SIDS (広義)児5例を剖検したところ、巨細胞性肺炎の1例をのぞき4例が、相当する死因がなく狭義の SIDS であった。ここは昭和57年に医師会と共同で、SIDS 発生率のサーベヤを行った所であり、産業医大小児科白幡研究協力者がいるためか、80%という高度の適中率である。(昭和57年度報告書)

福岡大法医永田協力者から、昭和45～57年間の6例(昭和56年度報告書)と、昭和58年度2例(昭和58年度報告書)の狭義突然死報告があり、なかでも昭和45年に窒息の鑑定書を書いたが、現在再検討すると SIDS そのものであったとの記載は SIDS 認識の重要性をものがたる。

#### 5. Sleep Apnea

40生日より約45日続いた sleep apnea 例(北九州市立八幡病院症例)が報告された。結果的には百日咳抗体の上昇より、百日咳によるものと解釈されたが、Sleep apnea の一成因として、SIDS の一成因となりうる可能性を示した。(昭和58年度報告書)

#### [発表文献]

山下文雄ほか、乳幼児突然死症候群一疫学的研究、小児内科、15(4)：433—440、昭和58年(1983)。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔年度別研究計画〕

- ( )56 年度:(1)疫学調査の予備調査(文献研究、方法論、統計法、評価法の検討)、(2)北部九州地区における SIDS(広義、狭義、不全例)発生率の調査(第1次)。
- ( )57 年度:(1)北部九州地区での SIDS 発生率の調査(第2次調査)、(2)リスク因子の設定。  
(3)低出生体重児での SIDS 発生とリスク因子の後方視的および前方視的研究(第1次)。
- ( )58 年度:(1)リスク因子の設定と予防への応用、(2)低出生体重児での SIDS 発生率の研究(第2次)。